

[実践研究]

教育社会学講義

— 敬愛大学 2023 年 —

武内 清

Lectures on Sociology of Education

— Keiai University 2023 —

TAKEUCHI Kiyoshi

要約

本稿は、敬愛大学教育学部の開講科目「教育社会学」の2023年度の講義と学生の反応を記録に残したものである。

「教育社会学」は、教職科目の「教育に関する社会的、制度的又は経営的事項」の中の選択の1科目として位置づけられ、こども教育学科2年生の必修科目になっている。

教育社会学は、さまざまな教育現象を社会的に分析するものである。学校は学級における授業を中核にしながらも、その他さまざまな活動が行われ、学校外からの社会的な制約も受け、児童生徒を教育している。教育の実態を明らかにする教育社会学の方法とその内容は、将来学校に勤務することをめざす教職課程の学生にとって役立つものである。

本稿は、筆者の2023年度の講義（2単位）の講義内容と学生の反応を記録に残したものである。

キーワード：教育社会学、遠隔授業、講義メモ、授業資料、学生

はじめに

敬愛大学では、2007年に国際学部の中に「地域こども教育専攻」が出来、2021年には教育学部こども教育学科に改組になり、「教育社会学」（2単位が）が、2年生の必修科目として新設された。

筆者は、その科目を2022年度から2024年度の3年間担当した。その記録を残しておきたい（主に2023年度の記録）。

教員免許状の中で、教育社会学は、「教育に関する社会的、制度的又は経営的事項」の中の選択の1科目として位置づけられている。

教育社会学という学問分野は、欧米で発展し、戦前の日本でも教育社会学という題名の著書が何冊か発刊されている。

戦後の新制大学では、旧帝大の国立大学と旧高等師範の広島大と東京教育大に、「教育社会学」の講座が設けられた。地方国立大学や私立大学では、いくつかの大学で学科目として教育社会学が開講された。「日本教育社会学会」が1948年に発足し、毎年研究大会が開催され、2025年には77回大会が開催されている。学会紀要（「教育社会学研究」）も116号まで発刊されている。現在の学会の会員数は、約1,500名である。教育社会学は、教

育学と社会学にまたがる研究分野で、会員には教育社会学が専攻者の他、教育学、社会学専攻者、現場教員、教育行政関係者、マスコミ人などが多い。

1 教育社会学の授業の方法とシラバス

私の2023年度の教育社会学の授業の形態は、第1回は対面授業で行い、授業で使うプリント集と冊子を配布した。プリント集は、A3のプリント31頁からなる。冊子は『教育、大学、文学、ドラマ、日常－教育社会学の考察』（武内清著、2022年、112頁、以下冊子と記載）で、その内容は、学校教育のことだけでなく、大学のことや、教育社会学の本の紹介、日常生活などを扱ったものである（武内清研究室<https://www.takeuchikiyoshi.com> 2022年11月13日参照）。副題に「教育社会学の考察」と付けたように、さまざまなことがらへの教育社会学的な見方を紹介したものである。

2回目以降の遠隔授業では、このプリント集と冊子の他に、「講義メモ」「授業資料」をKCN（WEB）で受講生に送り、授業の資料として適宜参照するように指示した。

2回目以降の授業を、オンデマンドの遠隔方式で行ったのは、私の講義を学生が主体的に学ぶには、対面授業よりオンデマンドの遠隔授業の方が適していると思ったからである。私の授業は、学生が講義を聞きながら配布された多くの関連文献を読み、それに対する自分の感想や意見を書かせることが多い。学生が授業資料を読んで考え、自分の意見を書く時間を十分に取るのは、対面授業より遠隔授業の方が有効と考えたからである。私のそれまでの敬愛大学での対面授業では、学生達は友人と私語をしたり、スマホを見たりして、授業に集中できない様子がよく見られた。それを避けたいと思った。

教育社会学のシラバス（2023年）には、下記のようなことを記載した（一部転載）。

「授業のねらい」；教育は真空の中で行われるのではない。社会的な状況（社会的理念、制度）の中で行われる。つまり公教育制度の要にある学校を中核にして、社会のさまざまな諸機関との連携

のもとに行われる。本科目では教育社会学の立場から「教育に対する社会的事項」「教育に関する制度的事項」「教育に関する経営的事項」「学校と地域との連携」「学校安全への対応」を含み、教育の諸現象を社会的に考察し、その問題解決の方策を探る。また学校教師が主体的に関与する方策も考える。具体的には、教育問題の原因の理解及びそれに対する教育現場の対処の仕方や教育政策、教育改革に関して理解する。学校をめぐる近年のさまざまな状況の変化を理解する。子どもの生活の変化と実態を理解しそれを踏まえた指導上の課題を考える。諸外国の教育事情や教育改革の動向を理解し、日本の改革とも比較し、日本でできること考える。学校と地域との連携を理論と実際から考え、学校づくりの方策を探る。災害が多発している中で、学校安全への対応を、危機管理含む学校安全を児童生徒の安全の立場から具体的な取り組みを理解する。その他、教育の社会的な側面について取り上げ、学校教育の効率や児童生徒の安全・成長を促進する方策への理解を深める。

講義内容（授業項目）；教育社会学とは、人間形成の社会的側面、学校の社会学、教育内容の社会学、生徒文化、ジェンダーと教育、社会的選抜と教育、学校安全、学校と地域社会、多文化教育、教育改革他。

授業の進め方；この授業は、KCNを使い、遠隔のオンデマンドの形式で行う。集中講義であるが、授業日を毎週の月曜日5時限に設定する。基本は、毎週その回の「講義メモ」と「授業資料」をKCNを通じて配信する。それらと第1回に配布したプリント集と冊子の指定の箇所を読んで、講義メモの最後にかかれている課題に関して、その解答（コメント）をKCNの「管理・提出」欄を通して、期日までに返信すること（字数は200～1,000字程度）。毎回の解答に対しては、担当者からコメントを毎回返信する。返信された解答の例は、受講者の了解を得て、匿名でKCNに掲示する

以下では、「講義メモ」と「授業資料（題名のみ）」と学生の反応（解答例を1つ）を、15回の講義のうち、紙面の関係で、9回に関して記録に残す。（受講者は70名）

2 第2回 講義(教育社会学とは、その2)

(1) 第2回 講義メモ 教育社会学とは

第1回は対面で、授業で使うプリント集(1~30)と冊子(『教育、大学、文学、ドラマ、日常—教育社会学的考察』)を配布し、教育社会学とはどのような学問なのか、どのような分野のことをどのような方法で扱うのかということを説明しました。

教育社会学は、教育学と社会学の重なる分野であり、教育という対象を社会学という方法で扱う学問、ただし対象が教育という価値を含んだ分野なのでその方法も自ずと価値的なものを含み、社会学とはまた一味違うものになっている、扱う教育の分野は学校教育だけでなく家庭教育や社会教育の分野も含む、と説明しました。

皆さんが教師になった時、一番関係するのは学校教育ですが、その学校教育は、真空の中で行われるのではなく、社会の状況(政治、経済、制度等)の中で行われ、社会のさまざまな諸機関との関係(圧力、連携等)のもとに行われます。同時に子どもたちは家庭生活の影響を受けて学校に入ってきます。子どもたちが将来出ていく社会は企業や地域社会です。それらも視野に入れた教育を学校で行うことが、教師には期待されています。つまり教育の社会的な側面も視野に入れる必要があります。そのような教育の社会的な側面をみるためには、教育を理想や個人の心理から考えるだけでなく、もっと広く集団や組織や社会や国の教育政策の実態を知る必要があります。またそれらの関係の実際を知る必要があります。それを考察するものとして、教育社会学はとても有効な方法です。

配布冊子のI-1、配布プリント1~3では、教育社会学の見方の特質に関して、「第1に客観性、第2に実証性、第3に脱イデオロギー」と記述しました。プリント2(藤田英典他『教育社会学』放送大学教育振興会、1998)では、教育社会学の理論として、機能主義、葛藤理論、解釈理論、批判理論の4つを上げ、その焦点、前提、主要な概念、分析のレベル、主要な問いと調査のトピッ

ク、批判、貢献した人が詳細に説明されています。

教育社会学には2つの流れがあり、1つは教育学に近い「教育的社会学」(Educational Sociology)。これは教師の為の教育社会学で、教育実践のための社会的条件を探ろうとします。もう一つは社会学に近い「教育の社会学」(Sociology of Education)。こちらは、教育実践には関心が薄く、教育やそれを取り巻く社会の仕組みを鋭利に客観的に見ようとします(配布プリント2、『教育社会学』有斐閣、1992)。

教育社会学の見方にはいろいろなバリエーションがあります。料理する時、扱う材料によって、使う包丁が違うように、見る対象の違いにより、見方も変わってきます。このような柔軟性をもつことも大事です。教育の世界は、とかく理想や法律がものをいい、型どおりに行えばいいと考えがちですが、教育の対象は生身の人間であり、柔軟な対応が必要です。その為には、広く柔軟な教育社会学的な見方は必要だと思います。

教育社会学は、学校教育だけでなく、広い分野の教育現象を扱うといいましたが、皆さんは、教育のどのような分野に関心がありますか。次の質問に答えて下さい。

質問A あなたは、「教育」のどのような側面に関心がありますか(いくつでも)。

1 人の成長や発達、人格形成 2 知識(教科)や技術の習得方法 3 人材の選別過程(試験、入試、学歴、昇進) 4 その他()

質問B あなたは、「教育」のどのような領域(場)に関心がありますか。(いくつでも)

1 家庭教育 2 学校教育 3 お稽古や塾の教育 4 地域教育 5 企業内教育 6 国の教育政策 7 比較教育国際教育 8 特別支援教育 9 生涯教育(学習) 10 その他

さらに配布冊子や配布プリントの該当箇所を読んで、教育社会学の内容や方法に関する理解を深めて下さい。そして、質問Cに答えて下さい。

質問C 教育の社会的な側面としては、どのようなことがあると思いますか。教育社会学的な方法や見方として、どのようなものがあると思いま

すか（あなたの理解したことを書いてください）

解答は200字～1,000字程度で、KCNの課題・提出欄から、武内に送って下さい。

（2）学生の解答（例）

〈教育社会学は、その特質を単純に言えば、第一に「客観性」、第二に「実証性」、第三に「脱イデオロギー」の3つである。その中でも私は、第一の「客観性」に着目した。客観性とは、伝統的な教育学のように「こうあるべき」という理想や規範から考えるのではなく、「こうある」という現実から考えるものである。私の普段の生活と照らし合わせて考えてみたときに、どうしても客観的に考察できていない部分のほうが多いのではないかと思った。何事も「物事はこうあるべきだから自分もこうでなくてはならない」と考えてしまいがちで重く捉えてしまうことが多い。そうではなく、今回の講義で学んだように現実からこうであるのだと考えることで気持ち的にも楽になるのではないかと思った。

また、教育的な見方の特徴は2つあり、1つは教育の高い理想や目標を掲げ、それに達していない教育の現実を非難すること。そしてもう1つは学校の授業だけに注目し、子どもたちが学校以外で学んでいることを軽視することである。

このことから、私は、理想よりも現実から考えることの重要性和、学校や教師や子どもを取り巻く社会的要因に注目しなければならないことを学んだ。

そして、学校制度は、政府の考えで人為的に変えることができるものだが、その制度変更が日本全体にいき渡ったり、その制度が実際にどのように教育現場で実践されるかは学校組織や教師の意識・授業、児童たちの心理や行動などそれらの相互作用にあるという。

私は、今の学校制度が変わったとしても、そもそも学校や教師、そして児童との関係性が非常に大事であり、私自身が教師になったときにどのようにしたら良い影響を与えることができるかしっかり考えたいと思った。〉

3 第3回 講義 人間形成の社会的側面、家庭教育

（1）第3回 講義メモ

皆さんの教育への関心は、「子どもの成長」や「人間形成」や「家庭教育」にある方が多くいました。第3回は、人間形成の社会的側面、特に幼児期の家庭教育について考察します。

動物の中には、親の庇護や養育がなくても、またそれが短期間で一人前になる種もありますが、人間の場合長期間の親ないしそれに替わる人の庇護や養育を必要とします。それがなく幼児期に野生に放置され、その後発見された「アベロンの野生児」の例などから、人間の養育なくしては、人間性や道徳性が育たないことが判明しています（授業資料3-1、住田正樹「人間形成と社会化」）。人間らしさは、先天的なものでなく、後天的に教育されるものと、「アベロンの野生児」の例から論じられることがよくあります。

子どもは、通常どこの国でも、家族で養育される場合が多く、母親の役割と父親の役割の分化もみられます。それについては、心理学者の河合隼雄の論（配布プリント6『母性社会日本の病理』中央公論社、1976）を読んで下さい。母親は「包み込み」、父親は社会を代表し「切断する」役割を果たす、と書かれています。ただ、男女平等、ジェンダーレスの今の社会の中で、この父と母の役割分担にも揺らぎが生じていると思います。皆さんは親の役割分担に関してどのように考えますか。

さらに、同じ母－子関係、幼児期の子育てでも、その仕方は国や文化によって違うことが文化人類学者の観察によって明らかにされています（配布プリント5、ベフ・ハルミ『日本—文化人類学入門』教養文庫）。ここで書かれているのは、少し前の日本の子育てですが、今は何か変わっていますか。同様に育児の書の国際比較の研究が、社会学や心理学でよくなされます。アメリカの育児書では、「性悪説」にたち、子どもは生まれもって悪をかかえているので、それを矯正する必要がある、子どものわがまを許してはいけない、子どもが泣いた時直ぐ抱き上げると抱いてほしいとす

ぐ泣くようになる、泣いていてもほっとおけば、諦めて泣きやむ、と書かれています。それに対して、日本の育児書で有名な松田道雄の『育児の百科』では、母親に抱かれて喜ぶ赤ん坊の心情に寄り添う育児を奨励しています（プリント7）。

さらに、日本の社会に浸透している「母の文化」に関して、文学（小説）から考察した、江藤淳の『成熟と喪失—母の崩壊』（河出書房新社、1988）の最初の部分を掲載しましたので、読んで下さい。さらに子どもにとって母子関係には特別な思いがあることに言及した2つの文章が、配布プリントの中にあります。1つは、プリント6、武内清「子どもたちの内面の輝き」です。外で傷ついても母親のもとに帰ってくればその傷が癒される子どもの心情を書きました。昔流行った山口百恵の「秋桜」は、日本人に浸透している「母の文化」を歌い、多くの日本人の心を捉えました。

一方、母の自分の子どもへの献身は、自分を犠牲にして子どもに尽くす、無償の愛の側面が強いと、母の文化の中で育った私達日本人は肯定し勝ちですが、そのことへの再吟味も必要だと思います。母親の自己犠牲は皆に幸福をもたらすのでしょうか？（配布プリント8 シェル・シルヴァスタイン・村上春樹訳『おおきな木』 あすなろ書房、2010を参照してください。また、母と娘は仲がよく葛藤はないと一般に思われていますが、実態はそうとは限らないということ、写真家の藤原新也は、渋谷で多くの少女たちの写真を撮る中で感じたことを書いています（授業資料3-2）。母—子関係に関しても、多様な見方が必要だと思います。

子どもの社会化、特に幼児期の家庭における社会化に関しては、母親と父親の役割、母子関係、父子関係、無償の愛、親子の葛藤など多くの問題があります。

またそれは時代により変化し、国や地域によっても違います。そして社会化の基礎をそれぞれの家庭で形成され、またその養育の問題を弱い子どもは背負い、トラウマをかかえながら学校に入學してきます。その中で、教師がどのような役割を担うかが問われるわけです。

今回の課題は、家庭での子どもの社会化、つまり家庭（あるいはそれに替わる場所での）養育や教育はどのようにあるべきなのか、現代日本の実態を踏まえて、自分の考えを書きなさいというものです。

（2）学生の解答

〈子どもを育てていく中で母子関係や親子の葛藤など様々な問題があるが、特に私は母親と父親の役割について注目していきたい。母親と父親は役割や原理が相対立して分かれている。母親は子どもの善し悪しを全て包み込むような役割を果たしているのに対して、父親は子どもが持っている能力や個性に応じて類別していくような切断する役割を果たしている。この二つを比較すると、母親の役割のように母性的な面が父親の役割よりも優勢であると考えられている。

しかし、現代の日本では男女平等やジェンダーレス社会の考えが定着し始め、母親と父親の役割が明確ではなくなっている。このような社会の中で子どもを養育・教育していくためには、互いの役割を理解しながら母親と父親が協力していかなければならないと考える。役割を決めつけ、どちらかに負担をかけるのではなく、それぞれの得意分野を活かしながら協力して育てていくことが重要である。

また、親の一方的な考えや方針で育てることは子どもの社会化にとって欠如していると考ええる。資料にもあるように、子どもの内面には様々な感情があり、学校で起きた出来事や友達とのやり取りで起きた出来事などを親にも共有したい姿勢を持つ。子どもにとって身近にいる母親と父親はかけがえのない存在であり、親は子どもに寄り添いながら理解していくことも重要である。最後に、子どもの社会化は子どもが自分の能力や個性を大切にしながら社会の中で決まりやルールを身につけ、行動できるようにするために、母親や父親、子どもへの理解を深めながら支え合っていくべきだと考える。〉

4 第4回 講義 学校の社会学

(1) 第4回 講義メモ

日本の学校制度の特質に関しては、「教育原論」の授業で学んだと思いますので、ここでは簡単な説明だけにとどめます。

配布プリント10（「日本の教育制度」）に、戦後日本の「単線型学校制度の採用」の経緯、それが「教育における平等」（教育の機会均等）に適した制度であること、学校の種類（小学校、中学校、高等学校、特別支援学校、幼稚園、高等専門学校、中等教育学校）、義務教育、普通教育、専門教育や高校3原則等の説明があります。これら「学校教育法」等の法律に基づく教育制度に関しては、基本になるものです。この日本の学校制度を前提として、学校を社会学的にみるとどのようなことがいえるのかを、今回は説明したいと思います。

1 家庭と学校の違い（配布プリント7、武内清「子どもにとって学校とは」『子どもと学校』学文社、2010）

学校の特質を、家庭の特質との対比で考えてみたいと思います。第1に家庭では、子どもの性別や出生順位など属性が重視した子育てやしつけが行われることが多い（属性主義）。「女の子だからお行儀よくしなさい」「お兄さんなのだから我慢しなさい」等。それに対して学校では、子どもの属性に関係なく、「よい成績をとることができる」とか、「先生の言いつけを守ることができる」のかといったことができることやすることが評価される（業績主義）。

第2に家庭では、その家の子どもだからということで、子どもはかわいがられ、特別の配慮がなされる（個別主義）。それに対して学校ではすべての生徒が公平平等に扱われる。性別、出生順位、貧富の差など考慮されることなく、良いことは良く悪いことは悪いとされる。教師が特定の子どもをえこひいきすることは一番非難される（普遍主義）。

第3に、家庭では感じたこと思ったことをそのまま言ったり、怒りや悲しみを自由に表現できたが（感情性）、学校では感情を抑さえ怒りも爆発

させず理性的にふるまうことが奨励される（感情的中立性）。

第4に家庭ではテレビを見ながら食事をしたり、音楽を聴きながら勉強したりできたが（拡散性）、学校では国語の時間には国語の勉強以外のことはできないように、一時に一つのことをする（限定性）。

第5に親との関係は一生続き、親は他の人に替わってもらえないかけがいのない存在である（機能的代替不可性）。それに対して先生は学年や教科で替わり優秀な人がいればその人と取り換え可能な存在である（機能的代替性）。

このような家庭とはたらく原理が違う学校という場で、子どもたちは1日のうちの多くの時間を過ごし、卒業後に出て行く社会の規範や原理を学んでいます。

2 授業の構成要素

学校教育の中核に授業があります。その授業は4つの構成要素から形成されます。Ⅰカリキュラム（教科書）、Ⅱ学習の場（教室、学校）、Ⅲ教師、Ⅳ児童生徒です。それらの要素がいろいろな形で組み合わせたり、児童生徒に影響を及ぼしています。4要素すべて揃った学校教育の中核が授業ですが、それ以外の場でも学習が行われています。たとえば、生徒が自分で教科書を読んで学ぶ場合、授業以外の場での教師と生徒の関係、さらに生徒同士の関係、教室にいるということ自体からの影響（学び）もあります。このように教科書の内容、教師という存在、生徒同士の関係、そして学習の場という4つ、さらにそれぞれの組み合わせから生徒たちは何を学び、どのように影響を受けているのかを知ることがとても重要なことです。

児童生徒たちは、教室で教師から知識を伝えられ実技の指導を受けるだけでなく、学校内の友達関係や集団・組織・文化のさまざまな側面から学んでいます。たとえ生徒自身にそれら学んでいるという自覚がなくても、自然に影響される面が多くあります。学校で児童には明示されたカリキュラムとは別に、明示されていないけれど学校で生活すると自然と身につくものがあります（隠れたカリキュラム）。児童生徒はいじめを許さない

雰囲気のある学級で生活することで、いじめをしない態度を身につけます。学校で男女が平等に扱われることによって、男女平等意識を身につけることができます。

それらは社会に出てから必要な態度に結びついています。クラブ活動で先輩に敬意を払うことは、将来職場で上司に従う態度を養います。学校の校則を守ることは、将来社会の法律を守ることにつながります。学校に遅刻しないことは社会での時間厳守の習慣をつくります。学校での努力は、社会に出てからの頑張りをつくります。学校で男女が平等に扱われることは、社会での男女平等意識を形づくりします。このように、学校には児童生徒が将来出て行く社会に必要な能力や態度を身につけることを教えています。

3 学校の組織的特質（配布プリント7、11、『教育社会学』有斐閣、1992）

学校は近代社会の組織であり、それは官僚的な側面と非官僚的な側面があります。（以下略）

今回の課題は、1から3のどれかに答えなさいです。1 日本の学校制度や学校の特質に関して、今回理解したことを挙げなさい。2 子ども達は、学校でどのようなことを学んでいますか。3 学校の官僚制化（合理化、標準化、効率化等）をすすめることにに関してどのように思いますか。

（2）学生の解答

〈子ども達の学びは、「カリキュラム（教科書）」「学習の場（教室、学校）」「教師」「児童生徒」これら四つが様々な形で組み合わせりながら子ども達と学びを生んでいる。この4つが全て揃ったものが授業である。しかし、授業以外の学校生活の中にも学びがあらゆる所に存在する。授業と学校生活、子ども達はそこで多くの学びを得ることが将来、社会で豊かな生活を過ごすために必要だと考える。学校のなかの「授業」での学びは、基本的な教育を与えられると考える。国語のような言語能力や算数の計算力など生活に必要な能力を学習する。授業で学習したことがその時に必要でなくても、数多くの知識・能力を獲得しておくことで将来自分のやりたいことを見つけるきっかけになる。学校は社会に出た時に必要とされる能

力を学べる。社会適応能力を学校生活の中で自然と学ぶことができる。大人になって身につけるのでは遅いため、学校という社会で学んでいる。子ども達本人には学んでいる意識がなくても、自然に学んでいる。学校で明示されたカリキュラムとは別の学校で生活していく中で自然に身につけるものを「隠れたカリキュラム」とよぶ。社会に必要な能力や態度を身につけるように学校では様々な場面が設定されている。学校の学びは必ず将来役に立つものだと考える。〉

5 第5回 講義メモ

「主体的、対話的で深い学び」とは何か

（1）第5回 講義メモ

今回は、教育の内容の社会的側面を取り上げます。「カリキュラムの社会学」という分野です。学校教育でどのような内容を教えるかということは、日本では、文部科学省が10年ごとに改定する「学習指導要領」で示します。その「学習指導要領」に関しては、教育界や教育現場では絶対的に正しいものとする傾向がありますが（その為、教員採用試験によく出題されます）、それは時代と共に変わるもので、必ずしも絶対的なものとする必要はありません。「学習指導要領」に関する私の見解を、授業資料5-1（「学習指導要領の社会学」）に書きましたので、読んでみて下さい。

今の「学習指導要領」の内容に関しては、これまでの授業（教育原論、教育課程論等）で、説明があったと思います。その中核に、「主体的・対話的で、深い学び」（アクティブ・ラーニング）があります。これが、今の時代に教えることが期待されている教育内容（カリキュラム）の中核と考えていいでしょう。

「主体的・対話的で、深い学び」に関する文部科学省の説明を、下記の添付の授業資料に示しましたので、それを読んで、概略を理解してください。

主体的とは「興味や関心を持つこと」、対話的とは「他者との対話」、深い学びとは「知識相互の関連付けや創造」と説明しています。そして「知識及び技能の習得」、「思考力、判断力、表現

力の育成」、「学びに向かう力、人間性の涵養」がこれからの社会に必要な資質・能力として説明しています。

同じく文部科学省の説明として、「学習指導要領改訂の方向性（案）－新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実」の中にも、「主体的・対話的で、深い学び」の説明があります。参照してください（配布プリント16）

さらに、この「主体的・対話的で、深い学び」（アクティブ・ラーニング）は、OECDの「キー・コンピテンシー」や「21世紀型スキル」からヒントを得て、日本の文部科学省が新しい学習指導要領の中心の考え方に据えたという経緯もあります。そのOECDの考え方に関しては、配布プリントの18（松尾知明『教育課程・方法論－コンピテンシーを育てる授業デザイン』を参照してください。）

次に「対話的」な学びに関して、少し詳しく考えたいと思います。これは他者や集団や社会との対話ということです。特に学校では、先生だけでなく、クラスメートや先輩や学校関係者（職員やカウンセラー）との対話が重要になっています。「子どもたちのサッカーチームでも、大人が指示するのではなく、子どもたちに話し合い（対話）でいろいろなことを決めさせる。結果も付いてきて、子どもたちの主体性と自立心が育つという」－このような新聞記事〈朝日新聞、2021年2月20日〉もありました。

思想家の内田樹は、知性は集団的なもの（つまり対話的なもの）と述べています。

〈私は、知性というのは個人に属するものというより、集団的な現象だと考えている。人間は集団として情報を採り入れ、その重要度を衡量し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意形成を行う。その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力の全体を「知性」と呼びたいと私は思うのである。ある人の話を聴いているうちに、（中略）「それまで思いつかなかったことがしたくなる」というかたちでの影響を周囲にいる他者たち及ぼす力のことを知性と呼びたいと私は思う〉（内田樹 ブログ2020年9月3日、「知識や知性の動的側面」参照）

次に「深い学び」について、考えてみたいと思います。心理学者の溝上慎一氏は、アウトサイドインとインサイドアウトという見方で、深い学びを説明しています。（授業資料5-3、『学習とパーソナリティ』東信堂）。学校や教師から学んだものを、自分の関心で内面化して、それを外に出していく、それが深い学びではないかという解釈です。学ぶということは、最初は外から中に入って来て、自分の関心と結びつき、外の表現していく。自分で学んだものを、対話で他の人に説明していくと、理解が一層深まります。授業で、ペアワークで、理解したことを他の人に説明する場面を設定することの有効性を述べています。

今回の課題は、「『主体的・対話的で深い学び』とは、どのような学びですか、あなたの考えを書きなさい」というものです。

（2）学生の解答

〈私が考える「主体的・対話的で、深い学び」を3つの要素わけて考える。「主体的な学び」は、自ら進んで学び、あらゆる物事に興味・関心をもち、物事に疑問を持つ行為が大切だと思う。疑問を持つことで「自分で調べよう」という行動に繋がる。また、授業でも個人で明確な目標を立てて具体的な過程で学ぶ姿勢が大切になると思った。「対話的な学び」は、協調性をもって他者との対話を積極的にして、他者の意見を取り入れたうえで、自身の意見を深めて自分の意見を広げることだと思う。「深い学び」は、得た知識を他の知識相互に関連付けて、多角的な視点から物事を表現できるようなことや、それらの過程から学んだことを生かして、新たな課題の創出や問題の解決に向かうことだと考える。よって主体的・対話的で深い学びをまとめると、様々な物事に興味・関心を持ち、他者との対話から多様な意見を取り入れた上で、学んだことを多角的な視点で知識を相互に関連付けることだと思う。〉

6 第6回 講義 生徒文化の社会学

（1）第6回 講義メモ

最初の授業で配ったプリントの3つのページを資料として参照してください。1つはプリント21

で、生徒文化の4類型（勉強型、遊び型、逸脱型、孤立型）があります。右ページの武内の日経新聞記事（「非進学校『無気力』」に悩み）2018年10月1日朝刊）は、高校間格差と生徒文化の関係に関して論じています。

2つ目は、プリント22（武内清「学校文化の変革—生徒文化との葛藤を通して」『教育展望』44-8、1998）で、生徒達の独自のルールや規範は、「裏校則」と言われるものに近いという観点から説明しています。

3つ目は、プリント22-2の「生徒の下位文化をめぐって」で、生徒文化、とりわけ大人や教師の期待に反する反抗型（逸脱型）の生徒文化が発生する原因（契機）に関して、学業成績重視（受験等）との関係で、理論的に考察したものです（『教育社会学研究』第36集、1972年）

教育は教師－生徒（子ども）関係や親子関係のように、上下の関係の中で行われることが多いのですが、横の関係、つまり友人やクラスメイトとの関係の中で行われることも多くあります。皆さんが小中高校時代のことを思い出してみても、友人やクラスメイトから学んだことや影響を受けたことは大きかったと思います。

日本の小中高、そして大学も、教員や教育の質はどこの学校や大学でもそんなに変わりません。その学校や大学でどのような人達（仲間）と授業を受けるのか、どのような友人と出会うのが、学びの量と質をかなり決定します。

アスピレーション（野心）が高く、将来に向けて学ぼうという意欲が高い生徒や学生が多い学校や大学で学ぶのと、アスピレーションは低く、少しでも楽をして学校生活をやり過ごそうと考えている生徒や学生が多い学校や大学では、学びの差が出てしまいます。

それは、教育の質というよりは、生徒文化や学生文化の差、その影響の差です。学校選び、大学選びもそこで出会う友人の特質を考えてのことが多いのではないのでしょうか。

生徒（子ども）達は、学校で一緒に過ごす時間が長く、そこでの相互作用（人間関係）を通して、ある特異な文化（行動様式や価値観、サブカルチャー）

が生まれ、そこから影響を受けます。大学生に出身高校名を聞くと、何となく納得してしまう（「××高校の校風からこのような特質を身に付けたのだな」と感じる）ことはあると思います。

同じ高校の中にも、いろいろな友人グループがあって、それぞれ特異な文化（行動様式、サブカルチャー）があると思います。それを私は昔、高校生に対する調査から「勉強型」「遊び型」「逸脱型」「孤立型」という生徒文化を抽出したことがあります（配布資料21）。また女子高には、「勉強グループ」「オタッキーグループ」「ヤンキーグループ」「一般グループ」の4つが存在していると観察から指摘した人もいます。

ただ、この生徒文化の類型やグループは、大分以前のもので、皆さんの中高時代のものとは違うかもしれません。それに対してはコメントして下さい（皆さんの体験から、今の新しい生徒文化に関して書いて下さい）。

この生徒文化（サブカルチャー）は、教師が生徒に期待するもの一致する場合があります（「勉強型」）、それに真っ向から対立するもの（「逸脱型」）、別の価値を提示するもの（「遊び型」）などに分かれます。「生徒文化」という言い方より、学校の「裏校則」と言われるものの方がわかりやすいかもしれません（プリントNO22の最初の方に、「下級生はスカート丈を短くしない」などの裏校則の例を挙げています）。

「教員は大人の文化を生徒に押しつけようとするのに対して、生徒は子ども集団に特有な文化の代表者としてこれに対抗するのである」（Waller, 1932）とも言われています。生徒や学生は教師に従順であればいいわけではありません。それでは、生徒や学生の自立性や主体性は育ちません。

時代の流行や消費社会の特質を取り入れるのは、大人や教師より児童・生徒の方が早いかもしれません。児童・生徒はそのような時代の先端を一早く取り入れ、自分たちの文化として楽しんでいます。そのような時代の先端の部分に関しては、教師が生徒に教わる場合も多いと思います（特に、音楽やゲームやSNSやデジタル関係など）。

今回の課題は、講義メモと配布資料（プリント）

を読んで、生徒文化（裏校則）について、あなたの考えを書きなさい、というものです。

具体的には、①生徒文化（裏校則）とは何か ②生徒文化はなぜ生じるのか ③生徒文化にはどのようなもの（種類、類型）があるか ④生徒文化にはどのような機能（はたらき）があるか ⑤教師は生徒文化にどのようにかかわればいいのか等です。

（2）学生の解答

〈子どもたちは1日の半分以上を学校で過ごすため、学校環境が子どもたちの成長に大きく影響すると考える。配布資料13に、武内先生が高校生に対して行った、アンケート調査の結果が記載されている。それは、高校生が答えたものから、「遊び型」「逸脱型」「勉強型」「孤立型」という4つの生徒文化に分けられている。1960年代の生徒文化は4つに分けられているが、現在はその範囲が2つに分かれていると感じる。私が中高時代の生徒文化には、一般的に「陰キャラ」と「陽キャラ」の2つの種類があった。これらの言葉は、日本の若者文化で、性格や行動パターンを表現するために現在でも使われている。「陰キャラ」とは、内向的で控えめな性格の人を指し、静かで落ち着いた環境を好む。一方、「陽キャラ」は、外向的で社交的な性格の人を指し、人との交流を楽しむ傾向があり、活発でエネルギッシュな行動を好む。これらの言葉はひとりひとりの性格に基づいて、人を区別するときに使われ、学校などでの人の行動パターンを表現するために用いられている。教育者はいち早く子どもたちの変化に気づく必要がある〉

7 第7回 講義 教育の選抜機能について

（1）第7回 講義メモ

教育には2つの機能がある。一つは人の人間形成であり、もう一つは人材の選抜である。今回は、後者の教育の人材選抜機能について考えたい。

初等教育ではこの機能はあまり重要ではないが、幼い時からの「お受験」や小学生の中学校受験もあり、親の子どもの学業成績への関心はこれに関係している。小学校教師としても考えておか

なければならない問題である。

近代以前の「身分社会」では、親の階層や職業によって子どもの将来の階層や職業も決まっていた。江戸時代には、親の士農工商という身分が、親から子へという身分（士農工商）に受け継がれていた。それが明治の近代の時代になり、教育が普及し、親の身分に関係なく、個人の能力や努力次第で高い教育を受け、その学歴で高い地位や収入の得られる職業に就くことができるようになった。

近代の社会においては、職業によっては高い学歴が必要であり（大学卒の学歴が必要な職業はいくつもある。教員資格も大学卒が求められている）、学歴によって賃金が違う職業もある。このように「学歴社会」には、才能や努力が評価される能力主義（メリットクラシー）という側面がある。また一般に高学歴の方が威信（人からの尊敬度）も高い。

また、学歴社会は、一度競争に敗れた人にも、再挑戦の機会を与え、「再加熱」「代替的過熱」などの機会を提供する仕組みを設けている（配布プリントNO20 竹内洋『選抜社会』リクルート出版、1988年）。

これまでの日本における学歴獲得競争、そして現代の様相に関しては、配布プリント19、武内清「加熱化する進学熱－学校教育の光と影」『児童心理』2017年12月臨時号）参照。

ある特定の職業や地位を求める人が多いと、選抜をせざるを得ず、教育（学歴）の獲得競争が発生する。その選抜や競争は、全ての人に公平に、厳正に行われなければならない。そこに親の地位や縁故や性や人種（国籍）やなどがはたらいてはいけない。親の地位が高く高所得の子どもが、高い教育を受けるのに有利であり、親が低い地位で所得も低い親の子どもが低い教育に甘んじなければならない社会は、教育の機会均等に反する社会であり是正されねばならない（配布プリント20「家庭の教育格差」参照）。

人材の選抜は、公平を期すため、計量可能な「学業成績」でなされることが多い。小学校でも、児童の成績が付けられ、その成績をみて、将来の教育や職業を考える子どもや親も多いであろう。

学業成績は、人の評価の1つにしか過ぎないが、それが、子どものいろいろなことへの自信（自己概念）にも繋がる。学業成績のよい子どもは、さまざまなことに自信を強め、そのわるい子どもは、全てに自信をなくす傾向がある。

このような教育における選抜や競争は必要なことなのかという疑問も起こる。選抜や競争をどのように考え、それをどのように子ども達に教えるのか。

子ども達に競争意識をどのように指導したらいいのか。勉強に関して子ども達の競争意識を鼓舞するような形で指導した方がいいのか、それとも競争意識は極力抑えて、子ども達の能力には差はなく、競争よりは共同（協働）意識こそ大事と指導すべきか。

成績の付け方も絶対評価（成績の割合を決めない。オール5でもよい）と相対評価（成績の割合を決める）がある。

勉強だけでなく運動でも競争はつきものである。スポーツの部活動でも楽しむことを優先する場合と、他校に勝つこと目標に据えることがある。このような競争に関する意識や行動を、どのように考えるべきか。

人は競争によってやる気が出て、競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動でも必要なことなのか。それともやる気や頑張りは、そのこと自体の面白さから出てくるもので、他の人より秀でたり競争で勝ったりすることから得るものではないと考えるか。また受験は、過保護に育てられた現代の子どもにチャレンジの機会を与える唯一のものという見方もある。人生は一生続くマラソンレースのような競争の連続であればいいのか。実際今の社会では、人々はさまざまな競争にさらされている。

これらも含め、競争や受験をどのように考えるか。そもそも競争とは価値があるのか、競争の基準は何か、競争から降りて気楽に暮らすのもいいのではないかなど、教え子からから聞かれたらどう答えるか。

今回の課題は、以下のようなことです。教育の選抜機能に関してどのように考えますか。具体的

に以下のようなことです（1～5のうち、いくつかの答えでも構いません）。

1 競争心によって頑張ろうと上を目指すことは勉強でも運動でも必要なことだと思いますか。
2 受験という競争に関してどのように考えますか。
3 「能力主義」や「学歴社会」に関してどのように思いますか。
4 教育と格差の関係についてどのように考えますか。
5 教師として教育の選抜機能をどのように扱いますか。

（2）学生の解答

〈私は競争心によって頑張ろうと上を目指すことは、勉強でも運動でも必要なことだと考える。近年ではVolatility（変動性）、Uncertainty（不確実性）、Complexity（複雑性）、Ambiguity（曖昧性）の頭文字をとったVUCA（ブーカ）とよばれるものもでてきたが、この意味にもあるように先のことは予測が困難になっている。そこで求められるのはそれに対応できる対応力や柔軟性、適応する優秀な人材であると私は思う。そのために必要なのは様々な分野で特化している人材や人手ある。そのように考えると私は競争が必要になってくるのではないと思う。競争心によって上を目指すことで児童期の時点で自分の得意なこと・好きなことを多く見つけ、そこで親や児童自信がしたいことを特化して伸ばすことで、この先の予測困難な時代も国として対応していくことが可能になっていくと考える。〉

しかしそれにより自信をなくす子も出てきてしまう。そこで教師として児童に様々なことに挑戦させて得意なことを見つけるサポートをすることや、得意不得意が人間にはあり不得意なことを克服することも大事ですが、得意なことを伸ばすことの大切さや個性について理解し気づかせることが教師としての役割なのではないかと考える〉

8 第9回 講義（ジェンダーと教育）

（1）第9回 講義メモ

このテーマの話は、他の授業でも一度聞いたことがある人は多いと思いますが、教育社会学でも重要なテーマです。ジェンダー（gender）とは何でしょうか。ジェンダーは、性の生物学的な側面

に注目したsexとは区別して、性の社会的文化的な側面に注目した言葉です。

私たちは性に関して生物学的な決定論を信じているところがあります。そして生物学的なもの和社会的なものは関係していますので、ジェンダーはなかなか理解が難しい事柄です。

カタツムリは両性具有で、人間も最初は全てメスで、オスとメスというのは、生物学的にはそんなに大きく違っているものではないのに、社会的には男と女で大きく2分されています。最近は性の多様性についてはいろいろ認められるようになっていますが。

第1に、授業資料9-1を読んでください。日本のジェンダー研究の第1人者の上野千鶴子が「セックスとジンダーのずれ」（『ジェンダーの社会学』岩波書店、1995）で、性に関する社会学的な考えを明確に述べています。

生まれた時、性の判定を間違えられ、思春期になってそのことに気が付いた時、その後の人生をどちらの性で生きていくのがいいのかという問いが立てられています。普通、生物学的な性に合わせれば自然でいいと考えがちですが、実際はその逆で。性転換の手術をしてでも、思春期までに形成された社会的心理的な意識（性自認）の方に合わせた方が生きやすいという例が多いと説明されています。

第2にあなたは、学校において教えられることや指導の仕方が、男女で違うことはありましたか。カリキュラム、部活動、生徒会活動、進路指導について考えてください。

授業資料9-2の谷田川ルミ「学校におけるジェンダー」（『子ども問題事典』パーベスト社、2013年）を読むと、大学進学率や専攻には性差があり、教師は男子の生徒に高い期待をかけ、女子に期待せず、生徒会や部活動の長は男子が占め、そのサポート役に女子が回るなどの「かくれたカリキュラム」が存在することが指摘されています。このように感じたことありますか。

第3に日本の社会で、なぜ上位の地位を男性が占め、女性が少ないのでしょうか（国会議員の数の性差はその典型、女性首相なし）。たとえば、学校で

女性校長は少ない（その割合 2022年：小学校 25.2%、中学校 9.8%、高等学校 9.3%）。その理由はなぜでしょうか。女性の能力が低い、女性にリーダーシップ能力がない、女性は子どもを産む、子育てに忙しいなどがあるのでしょうか。女性にはガラスの天井があると言われています。その理由を考えてください。

授業資料9-3の河野銀子「教師のキャリアとジェンダー」（『教育社会学辞典』丸善出版社、2018年）読むと、形式的には男女平等でも、実質的に女性のキャリア形成には不利になる仕組みが、学校システムには埋め込まれていることがわかります。

第4に、では男性は優遇されて楽な人生を送っているのか（生きづらくないのか）ということを考えて下さい。「男らしさ」を期待され、それにえられない男子も多く存在します。男性の生きづらさの根っこは女性のそれと同じという多賀太氏の論（授業資料9-4,5）を読んで考えて下さい。

「教育とジェンダー」に関する教育社会学の研究は多くの積み重ねがあります。その過去と最前線を知りたい方は、『概説：ジェンダーと教育』研究の展開』『教育社会学辞典』（参考9-1,2）を参照してください。

今回は、授業資料を読み、「教育とジェンダー」というテーマに関することを考える内容です。例えば、下記のような課題です（下記の1つでも複数でも）。

1 セックスとジェンダーの違いやズレについて説明しなさい。 2 学校における教育内容や授業や進路指導で、男女の違いはありましたか。 3 日本の学校で、男性教員と女性教員でキャリア（管理職の割合等）の違いが生じるのはなぜでしょうか。 4 男性は生きづらいと思いますか。その理由は。

（2）学生の解答

〈1 セックスとジェンダーは生物学的な性別と心理的な性別と違いがある。資料1にもあるように性転換希望者に男もしくは女として育てられ、第二次性徴期に性別の判定のまちがいに気づく事例に対し、その患者は性自認の形成が強固にされているため自分の性自認に生物学的身体を合わせ

る道を選ぶケースが多いと書かれていた。ここから、性別判定をして男女の考え方を子どもに強要することはその子が生きづらくなる道を作ってしまう。そしてジェンダー問題として繋がってしまうため日本の昔からの文化を崩す改革をしないと解決しないと考えた。

2 学校における男女の違いは、資料にもある通り進路選択、教師の発言、役割分業などが挙げられるがそれらを自分の経験を基に詳しく説明する。それは、団長や部長などが男子であること、授業の教材配布の際に「男子の力持ち〇人荷物運びに来て」という教師の発言、学級会で書記を「女子は字が綺麗」という理由で女子が務める、サッカー部や野球部に女子が入れない、体育の生理などの自分の性別に関連する授業を別々にして男女で知識の違いを生じさせるなどがあると考えられる。特に体育の例では将来パートナーができたなら男性も知らないといけない知識になるし性的な話は女子にしか起こらないことでも男子も知り助け合える環境を作るべきだと考えた。

4 男性は生きづらいと考えた。なぜなら隠れた社会の力があるからだ。女性はジェンダー不平等の異論をしたことで職場での女性の地位や選挙権などを獲得した。しかし、実際アルバイトや部活、政治家など周りのリーダーの地位は男性が多く、表面上は男女平等といわれているけど会社の暗黙として先祖代々の後継者や上の地位からの指名などから男性が多いイメージがある。こういった点で女性は、リーダーを支える役割が多く、給料は一緒でも仕事量が増えることで辛くなるのではないかと考えた。今まで女性は先陣をきる文化がなかったからこそ男女平等になっても経験の面からどうしても男性の仕事量が増えてしまうのではないかと考えた。また、セクハラ問題は一番男性の不利な状態で男性は女性に触ると罪に問われるのに女性が男性に触ると罪にならない男性の不利な社会である。これらから、ジェンダー問題は男女の文化を作り継続したことから生まれ根強く思想が残っているからこそなくならない問題だと考えた。)

9 第9回 講義メモ 学校における「安全教育」

(1) 第9回 講義メモ

今回は、学校における「安全教育」に関して取り上げる。学校に通う児童生徒を安全に保つのは、学校や教師の果たすべき基本的な要件である。またそれは児童生徒が受け身であるだけでなく、安全の為に行動する態度を身につけることでもある。安全教育に関しては、文部科学省や各都道府県が通達を出しているの、それを読んで基本を理解してほしい。次に、「安全教育」の実際に関して教育社会的な考察も参照して、「安全教育」のあり方を考えていただきたい。

まず、ネットで「安全教育」というキーワードで検索すると、いろいろなサイトが出てくる。たとえば下記Aでは、その概要が易しい言葉で説明されている。

A 「安全教育」とは？【知っておきたい教育用語】(<https://kyoiku.sho.jp/125905/>)

次に、文部科学省の代表的な通達 (B) を見てみよう。

B 「学校安全資料『生きる力』をはぐくむ学校での安全教育」について

https://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/anzen/1416715.htm

C 千葉県教育委員会も、いろいろ通達を出している。

(1) 千葉県「防災誌」(H21.3 (元禄地震、関東大震災)／H22.3 (風水害)／過去に千葉県に大きな被害をもたらした災害を後世に正しく伝えるとともに、その教訓を再認識していくために作成。
<https://anzenkyoiku.mext.go.jp/todoufukun/data/12chiba/12-05/12-05-1.pdf>

(2) 千葉県 学校安全の手引 (令和2年3月発行、令和3年5月20日改訂)

<https://www.pref.chiba.lg.jp/kyoiku/anzen/kodomo-anzen/kodomo-anzen.html#tebiki>

(3) 千葉県 巻末資料 (学校安全計画)

D 学校安全の施策が、他の学校の施策 (例えば学校開放) と抵触 (矛盾) する場合もあり、

そのジレンマに苦しむ場合もある。「不審者対策に悩む学校 地域開放と安全確保どう両立設備に差、監視に限界」

<https://www.nishinippon.co.jp/item/n/429510/>

- E 学校におけるいじめ問題も、児童生徒の心理的・身体的安全を脅かすもので、教師は、いじめ問題に、敏感に対応しなければならない。文部科学省「学校におけるいじめ問題に関する基本的認識と取組のポイント」

https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seito_shidou/06102402/002.htm

- F 教育社会学の研究者の内田良・名古屋大学教授は、安全を脅かされた大きな事件（例えば学校への不審者の侵入、児童殺人）が起きると、世間も文部科学省のそのことに注目して対策をとるが、起こる頻度はそのことよりもっと多いものが他にある（柔道による死亡事故など）。リスクの頻度に注目した対策も必要と提起している（さらに詳しい専門的考察に関しては、下記参照）内田良「学校事故の「リスク」分析——実在と認知の乖離に注目して——」（教育社会学研究86集（2010））

https://www.jstage.jst.go.jp/article/eds/86/0/86_201/_pdf/-char/ja

- G 防災教育

多くの人が犠牲になった東日本大震災をめぐっては、多くの児童が犠牲になった大川小学校や、一人の犠牲者も出さなかった「釜石の奇跡」に関しては、多くの動画もネット上に掲載されている。

- ① 大川小学校

http://memory.ever.jp/tsunami/higeki_okawa.html

- ② 釜石の奇跡

<https://www.bosai.yomiuri.co.jp/feature/1831>

これら見ることから、大地震の際の対応、それ以前の安全教育や訓練に関して考えたい。

東北への支援を続けている敬愛大学では、2月20日に大川小学校に通っていた娘を亡くした語り部の佐藤敏郎氏の「東日本大震災から学ぶ私たちの未来～満10年を迎える東北の被災地に私たちが学ぶべきこと」という講演会を開催している。私もWEBであるが、視聴した。とても心打たれる

講演会でいろいろなことを学んだ。

<https://www.u-keiai.ac.jp/keiai-topics/shinsai101ecture/>

今回の課題は、以上の「安全教育」の資料を読んで、あなたが教師になった時、特に重視したい「安全教育」は何ですかである。

（2）学生の解答

〈私が教師になったときに特に重要視したい安全教育は、防災教育である。大川小学校と釜石の奇跡という資料と「3.11に思う」のブログを読み、学校が持つ防災意識の違いからこんなにも被害の差が出てしまうものなのかと非常に驚いた。学校の誤った判断によって失われた命があることを知ると同時に、学校の正しい判断により守られた命があることを知った。大川小学校の悲劇には日ごろからの防災教育がされていなかったことも問題として取り上げられているが、災害時の教師の行動にも大きな問題があると感じた。しかし、いざ自分が大川小学校の教員だったらと考えると、子どもたちの命を託された立場としてどんな状況でも子どもの命を最優先に考える責任があることはわかっているが、子どもたちを目の前にして冷静な判断を下せるのかを考えるとパニックになってしまうと思う。一方で釜石の児童たちが迅速に対応できたのは、紛れもなく日ごろからの防災教育が影響していると思うし、日々の暮らしの中で防災を子どもたちに意識させることが安全教育の一步であると感じた。〉

10 第11回 講義

他の受講者のコメントを読む

（1）第11回 講義メモ

大学の教室の対面授業では、グループや全体で学生同士の意見交換やディスカッションが行われることが多いと思います。同じ講義を聞いても、また同じ資料を読んでも、その受け取り方が聞き手によって違うことを知ったり、またクラスメイトとの対話によって自分の見方が変わったりします。小中高校の授業でも、児童生徒同士の話し合いやグループ討議がよく行われます。教師からの説明よりはクラスメイトから教わった方が、興味

が沸き理解が早い場合があります。この授業は遠隔で、しかも同時配信ではないオンデマンドの形式ですので、皆さん同士の意見交換をする機会をつくれませんでした。それを補うものとして、授業資料の中に、皆さんの毎回の解答（コメント）の中から、いくつかをピックアップして、（名前は伏せて）、掲載しています（最初に掲載に関して、皆さんの了解を得ました）。

今回改めて、クラスメイトの解答（コメント）を読むことを課題にしたいと思います。今回は、この授業の授業資料に載った他の受講者の解答（コメント）をいくつか読んで、共感したもの、あるいは異論を感じたもの、また読んで自分の見方を変えたものなど、いろいろな感想を寄せていただきたいと思います。毎回、十数の解答（コメント）を授業資料に載せています。そのうちの1回ないし複数の回のものを読み、その感想を寄せてください。このように、「他の受講者の解答を読んで、自由に感想を寄せて下さい」が今回の課題です。

（2）学生の解答

〈今回他の人の回答を振り返ってみて自分の中では考えきれなかった深い内容に触れることができました。大体の意見では学校へは無理矢理に行かなくていいや、すべての子供が通う必要はないと回答している人が多いいました。私も同じ意見で、辛い思いをしてまでも学校に行く必要はないと考えています。そんな中で自分と同じ考えではありますが、ホームスクーリングについて反対意見を掲げている人もいました。現代の家庭の形では核家族が増え共働きの家庭が増え家族の中で学習を教えるという時間があまりとれないことや、やはり親よりも教育の専門的知識を持った教師のほうがしっかりと勉強を教えることができるという点があります。どうしてもいじめや学校へのトラウマがあるという子に対しての対処法となると「じゃあ学校には行かずに家で勉強するのがいい」ときれいごとで片づけてしまわれがちですがこの意見を見て現実的に本気で生徒と向き合うとなるとそうはいかないのも現実だなと思いました。〉

11 まとめ

教育社会学の最初の対面授業では、教員試験合格が第1目標の学生にとって、直接それに役立つかどうかわからない「教育社会学」という科目に、はたして興味をもってもらえるのか危惧した。

しかし、2回目以降の遠隔授業がすすみ、「講義メモ」「授業資料（WEB配信資料、プリント、冊子）」を学生に読ませた課題に対する学生の解答（コメント）を読むと、多くの学生が教育社会学の内容や方法に興味を示し、将来教員になった時、教育のことを広い社会的文脈で考えることの重要性を認識しはじめていることが伺えた。

たとえば、次のような学生のコメントが寄せられた（第13回講義の解答）。

〈私は教育社会学が教育実践に役立っていると考えます。何故なら私は時代が進めば教育の方法、考え方は変化するものであり、時代が進むということは社会が変わる。社会が変わればその影響が子供の生活や家庭に影響することが想像すれば見えてくる。教育社会学は教育事象を社会学の手法を用いて明らかにする。社会制度や個人の経験が教育制度やその成果に与える影響を研究する。家庭と社会の密接な関係、人と社会の関係は切っても切れない。そのため教育社会学はとても研究する価値のある学問だと私は感じる〉

〈教育現場において、児童の実態を知ることとは絶対的に必要なことである。そして、それが社会の実態とどう絡んでくるのかを知っていなければならないと思う〉〈冊子や配付プリントを用意してくれた事で課題にも取り組みやすく上手く自分の意見もまとめることに繋がりました。また、解答例を載せて頂くことで自分自身の教育社会学のモチベーションにつながり、半年間一生懸命取り組むことができました。興味深く、分かりやすい講義をありがとうございました〉〈今回の授業を受けて、私は教育社会学を通して教育はただ知識をつけ学んでいくのではなく、社会と深く結びついていることに気がつきました〉〈教育社会学では、教育とはただ知識をつけさせることではなく、社会で生きていくために必要な力を学ば

せることを知りました〉〈この教育社会学を通して、たくさんのことを学び、教師になるうえでの広い視野を少し身につけたと思う〉〈教育の持つ力を改めて実感し、教育者としての責任の重さを痛感しました。今後は、教育現場で公平で包摂的な環境を作り、多様性を尊重する教育を実践していきたいと強く思うようになりました〉

今回は、紙面の関係で、15回の講義のうち9回の講義メモと各回1名の学生の反応（解答）しか示すことができなかったが、受講生70名の毎回の解答のほとんどは、教育社会学の講義内容をよく理解していると思われるものが多かった。

学生の毎回の解答（コメント）から、敬愛大学教育学部の教員の指導力の高さと学生の教職への情熱と努力の高さも感じた。

第14回の講義メモには、教育社会学を学ぶ意味に関して、次のように書いた。

「教員を目指す皆さんは、教科の各科目の内容や指導法を学ぶと同時に、いろいろな教職科目の中で、教育社会学で取り上げたテーマや内容とおなじことを学ばれる（学んだ）と思います。そこに社会学や教育社会学の視点を加味していただければ、理解が一層深まると思います。教員採用試験の教職教養の中にも教育社会学の内容は含まれています。それ以上に、応募書類の書き方や面接や模擬授業の中で、教育社会的視点を入れて書いたり話したりすると、深みが増して好印象になると思います。また、実際教員になり教壇に立った時、教育社会学の授業で学んだこと、解答（コメント）を書く際自分で考えたこと、そこでの文章を書く練習などは、役立つと思います。過去に、千葉県の教員採用の合格者に「千葉敬愛短期大学」から卒業生が多く、その教育が「純粹培養」と揶揄されたことがあります（鎌田慧『教育工場の子どもたち』岩波現代新書、プリントNO26B）。教員採用試験に合格することも大事ですが、それ以上に大事なことは、実力のあるいい教員になることです。それに向けて頑張っていただければと思います。」

敬愛大学教育学部こども教育学科で「教育社会学」の授業が引き続き開講され、千葉県のみならず全国に、高い志を持ち、教育現象を客観的にまた主体的に考察する教員を送り出してほしいと願っている。

たけうち・きよし 敬愛大学・名誉教授 客員教授